

TOPICS

# 春彼岸を迎えるにあたって

般若心経の最後のお経は

「行こう行こう、彼岸へ行こう、彼岸へ行こう、幸いあれ」

住職 安本 利正



**彼岸**は字が示すとおり「彼の岸」であり、河の向こう岸であります。あるいは海の向こうにある大陸の岸でしょう。夕暮れに真っ赤な太陽が西の海へ沈みゆく景色は美しく、旅で感激した思い出は、誰でもあるでしょう。その美しさの中には遠い幻想の世界を感じます。それは昔から語られて来た西方十万億土にあると言われる極楽浄土です。

昔の生活には電気も機械もなく、厳寒の寒さにも着物数枚で我慢して薪と炭で暖房を取り、煮炊きして食べ、粗末な生活は今の人には想像もできない苦しいものでした。この現実の苦勞を脱する世界があるならば、極楽を求める願いは強烈なものであります。しかし、現実の生活は厳しく、まず働いて家族を守る事が第



春彼岸法要 (24.3.21)

一であって、余計な事を考える時間もなく追われていました。身近に出来ることは、暇をみて社寺に参詣して祈る程度の現実でありました。

仏教では河の向こう岸を「彼岸」と呼び、河の此岸を「此岸」と呼んでいます。彼岸は理想の極楽の世界であり、此岸は現実の苦の世界を示しています。お彼岸は「暑さ寒さも彼岸まで」と言われるとおり、夏と冬の中間に当たる七日間の行事であり、最初の日を「彼岸の入り」と言い、最後の日を「彼岸の明け」と言い、真ん中の日を「中日」と言っております。子供の遊び言葉に「入りのばたもち明けたんご、中の中日あずきめし」の伝承で誰でも覚えています。

彼岸という言葉は仏教用語で「彼岸へ到る」、漢文で「到彼岸」、古代印度語で「パーラミタ」と言い、般若波羅蜜多心経の中の「波羅蜜多」であります。波羅は「彼岸」であり、蜜多は「到達する」であり、彼岸の世界へ到達するのという意味であります。般若心経では「般若波羅蜜多心経」と書いて「般若」が付属しています。古代印度語で「パーニヤパーラミタ」であり、パーニヤの発音を般若と書き、意味は「智慧」であります。それは唯の智慧ではなく、仏陀の悟りの智慧です。お釈迦様は二十九歳で出家し、老病死苦と対決し、ありとあらゆる難行苦行を重ねて六年余り、徹底した修行をしても

悟ることは出来ませんでした。悟りは苦楽の両極端に片寄らず、すべてを平等に観察する「中道」にあると知って苦行林を出て菩提樹の下に座して、深い瞑想に入り、悟りを得るまで座禅を続けると決心しました。苦行中の悪魔の誘惑、欲望、恐怖、愛執、六年の苦行のすべてを克服して座すること七日間、ついに八日の朝に中道の真理を悟りて成道されました。彼岸の世界へ到達されたのです。



## お彼岸中に六つの慈善行為を

お彼岸中に実行すべき慈善行為として六波羅蜜(一、布施 二、持戒 三、忍辱 四、精進 五、禪定 六、智慧)があります。その中の第一の布施は「ほどこし」の行為であり、毎日の生活に直結した最も身近なことです。衣食住、労働、財産、心理(思いやり)言葉などに関する慈善行為です。深く考えると難しくなりますが、簡単なことを実行すれば、「子供にお菓子を渡して喜ばれる」や「愛ある言葉を交わす」なども布施の行為です。六波羅蜜を実行するのは大変ですから、最も身近な簡単な慈善行為をお彼岸に六つ実行するのが良いと思います。あるいは六人の親族友人に昼食を馳走して、その挨拶に「今年の春彼岸の波羅蜜としてお集まり戴きました」と説明したらどうでしょう。



昨年の春彼岸の様子 (平成24年3月21日)

## 写経会開催と初納経

平成25年2月11日(月)

安本利正ご住職様のもと般若心経を全員で唱える

2月11日12時から、萬福寺護持会第4回「写経会」が行われました。併せて、昨年12月16日(第3回)と当日(第4回)の写経をまとめ、安本利正ご住職様による法要が14時から本堂で執り行われ、その後摩尼輪堂(本堂前)に納経されました。研修委員会による写経会の納経は初めのことです。



平清盛入道直筆の写経(平家納経/厳島神社・広島県)。仁安2年(1167年)2月23日と記されている。平家納経は全33巻あり、傷みがひどいことから大正年間に復元された。萬福寺所蔵は「般若心経」を写経したものの一巻である(昭和60年に復元)。(写真下) 写経会風景(24.12.16)、円内は(右から)安本由道副住職、波田野草研修委員長、研修委員の鈴木百合子氏、岡・伊藤一也氏



2月11日、本堂で納経される安本利正ご住職(右)

間の生命、人間の心は永遠だということです。それぞれの心の中に必ず残っています。私の言葉も、たとえ私が死んでも皆様の心の中で生きている、そして、それを誰かに言い伝えられるなら、言い伝えとして残っていきます。こういう気持ちになれば、誰でも安心して最後を迎えられます。



写経は本堂前の摩尼輪堂へ奉納された。

## 涅槃会法要

平成25年2月15日(金)

午前11時から本堂右側に掛けられた「大涅槃図」(お釈迦様の入滅の有り様を表した絵画)の前で、報恩の法要「涅槃会」が行われました。



本堂右側の掛け軸「大涅槃図」



大書院にあるもう一つの特別な「大涅槃図」

鬼畜(鬼と畜生)などが大声で嘆き泣く様が描かれています。

もう一つの特別な「大涅槃図」

安本利正ご住職様から、「当山にはもう一つの『大涅槃図』(敦煌中国、第一四八窟)があり、大書院の床の間に飾られています。

この大涅槃図は、この部屋と敦煌を3回も往復し、4回目に完成したものです。1回目は、現地で描いた墨書の下絵を、この床の間に合わせた構図に少し変更(人物の向きなど)を施し、2回目は色彩などを指定、3回目は完成図とされたものに絵具を追加指定して、4回目によりやく完成図の確認ができ、そして表装されたものが、この床へ納まりました。これは現地で買ってきたものではなく、特別なものです」というご説明がありました。

心のこもった特別な「大涅槃図」の前で、改めて法要がなされました。